

## 編集後記

物理学で「空間の場所場所に物理量が存在する。それを場という」と説明していますが、イメージできません。ところが、宮地さんが「親子孫講座は知識を売っているのではなく、ノーミソが楽しむ「場」を売っている。」と書いているのを読んで、講座をやっている「場」も「もの」と同じように考えていいのではないかと思いました。

40数年前、私がある高校の教員だった時のことです。業者に生徒の昼食用のパンの販売をしてもらおうという構想を検討しているときに、「業者から場所代をとるべきだ」と主張した教員がいて、(世間のことにうとい)私は驚きました。しかし、考えてみれば、高校という場所はパン屋さんにとってとてもいい商売の「場」なのです。そこでは確実に一定数のパンが売れるのです。いい場所を提供しているのだから、場所代をとるのは当然だということです。パン屋さんも場所代を払うのを当然と考えていました。毎月払われた場所代は生徒会費に繰り込まれました。このとき、場所には値段がつくのだということを知ったので、修学旅行で京都の嵐山に行った時に生徒との会話で、「ものが売れるかどうかは、まず第一に場所が大事」ということをしゃべったのだと思います。

こういったことが次々につながって、「場」という考え方をすることでいろいろな問題が見えて来ました。仮説実験授業の授業運営法が他の授業運営法と大きく違っているのは、この「場」の持つ力を十分に発揮させるような運営をしなければならないということなのです。生徒が仮説実験授業を歓迎するのは、仮説実験授業によって作られる「場」にいることが楽しいからです。

講座の主催者は、「場」を提供しているという意識を持つことが必要です。「場」という考え方をいろいろな問題に適用してみるといろいろな問題が解決できるかも知れません。(渡辺規夫)